

評価を表す陳述副詞の史的展開¹

林禎映 (全南大学(韓国))

1. はじめに

評価²を表す陳述副詞にはアイニク、サイワイのようないわゆる「評価副詞」(工藤1997・2016)と呼ばれるものと、サスガ(ニ・ハ)、セツカクのような「叙法副詞」(同2000・2016)と呼ばれるものがある。前者は語彙的に評価性・情意性を有しているが、後者は意味変化を経て評価を表すようになったものが多い。本発表では歴史的に評価を表さないものが評価を表すようになった語類を主な対象として、評価を表す陳述副詞へ変化する過程に見られる意味的、形態・統語的特徴を考察する。

2. 評価を表す陳述副詞化の特徴

2.1 意味変化

副詞の形成には名詞や動詞など他品詞からの転成が多い(工藤2000)。評価を表す陳述副詞の出自も名詞出自をもつもの(イツソ(←一双)、ショセン(←所詮)、セツカク(←折角))、動詞出自をもつもの(セメテ(←せむ(迫・責))、複合構成要素から成り立ったもの(「サスガ(ニ・ハ)(←さ+す+がに)」、「ドウセ(←どう+せ(よ・い))」)などさまざまである。このような出自をもつ個々の語は全体の傾向として具体的な事物や動作の様態・様子を表す意味から、「望ましい、好ましい」か「仕方がない、うまく行かない」(プラスかマイナス)といった評価を表す意味へ変化している。

表1 評価を表す陳述副詞類の意味展開(概略)

	出自	原義	意味の展開		
イツソ	名詞	一双	対をなす二つ、二つ一組	まとめて、一度に	→ (マイナス評価) やむを得ず選択することへの自暴自棄的な気持ち
ショセン		所詮	経典によって説き明かされる内容	詮ずる所、結局	→ (マイナス評価) 最終的には好ましくない結果になることへの諦めの気持ち
セツカク		折角	角を折る、論争で相手を負かす	力・心を尽くして	→ (プラス評価) 価値や意義のある、好ましいこと
セメテ	動詞	せむ(迫・責)	対象に間隔を置かず差し迫る	つとめて、しいて	→ (マイナス評価) 最小限の範囲内において願うしかない嘆きの気持ち
サスガ(ニ・ハ)	複合構成	さ+す+がに	そのようにあるほどに	そう言っても(やはり)	→ (プラス評価) そうなるのも順当だと認める気持ち
ドウセ		どう+せよ	どのようにしても、どっちみち		→ (マイナス評価) 話し手の意志や意図とは無関係に成り立ってしまうことへの諦めの気持ち

表1のように具体的な意味が希薄になり、抽象的な意味(評価性)を獲得する意味変化の一般的な傾向が見られる。しかし、個々の語における意味変化の過程には①語構成要素や②文脈上読み取れる意味(構文的な意味)、③類似表現との関係などからの影響によってさまざまな経緯を辿っている。例えば、①と③の事例にドウセがある。ドウセは不定語の「どう」とサ変動詞「す」の命令形の「せよ(せい)」が組み合わさった「どうせよ(せい)」

¹ 本発表の内容は主に林禎映(2021a, 2021b)に基づき、大幅に加筆修正したものである。

² 本発表では、評価という意味機能を「望ましさの観点から文の叙述内容・当該事態について話し手の価値判断や感情面の注釈を示すもの」と考える。

を出自とする。その語構成に含まれる命令形が本来の行為実現の積極的要求の意を持たず、放任の意味を表す(小柳 2018、北崎 2023)³ことから、ドウセが副詞として用いられた当初(近世前期)、どのような場合であっても当該事態の成立に影響がないことを表す「どのようなにしても、いずれにせよ、どっちみち(結局成立する)」のような意味で用いられる(= 1a)。放任の意味を基盤としたドウセの意味は、話し手の意志や意図に関係なく事態が成り立つこと、換言すれば、その事態はどんなに動かしがたい事態であることを表すなかで、場合によってはその事態が話し手にとって不本意なもの、望ましくないものに捉えられることもある。このような例を経て、近世後期以降、ドウセは当該事態の成立に対する否定的評価(「どうしようもない、仕方がない」)を表すようになり、(1b,c)のように当該事態の成立を確信する述べ方や(語彙的、文法的)否定述語と共に起る例に偏る傾向を見せる。

(1)a. お前お一人にあのお心遣ひは、どふせ此世ばかりの終の縁ではござりませぬ。

(傾城禁短気・1711年・p.344)

b. 文「十八さ。おめへは」縫「主よりやアーツうへさ」文「十九か」縫「アイそれだものヲ。どふせ叶ねへ事た」

(深川新話・1779年・p.224・52-洒落1779_01025)

c. 遊女のくま「御存の通りわが儘ものだから、どふせ男の気に入る事ちやアありませんは」

(春告鳥・1836-1837年・p.508)

関連して、近世期に多用されるドウデはドウセと同じく不定語を語構成要素として有し、同じ意味の展開を辿っているが、ドウデとドウセの間には地域による使用の偏りがあったことが知られる⁴。また、近世において不定語を語構成要素にもつ副詞ドウモ・ナニモは、ドウセとの間で「不定語+α」の形が「反復形→単独形」「否定述語との共起増加」という類似した形態・統語上の特徴を獲得している。しかし、副詞ドウモ・ナニモは推定や非存在を表すことで事態の成立をどう認識するかを表す意味を持つものに対して(川瀬2023)、副詞ドウセは成立した(とみなす)事態について否定的評価の意味を持つことから、意味の面では異なるといえる。その違いの根源には前述した通り、ドウセが命令形の逆接仮定条件形式への変化と関連していることが、その意味の展開(範囲)に影響を与えていると考えられる。他に、不定語を語構成要素に含まないが、ドウセと類似した変化を辿るものとして、「とてもかくても」から成立するトテモがある。

(2)a. 山姥が山また山に山巡りハハハ面白い、どうでもかうで吾妻殿を奥へ連れてと、引き立つる。

(山崎与次兵衛寿の門松・1718年・p.502・51-近松1718_10001)

b. イヤ、夫ハ病による、或ハつき物か、外から身入等の病なれハ、加持きとうでのく事も有ふが、五臓から損じて出る病き、どうで治る道理がない。

(噺本・慶山新製曲雑話・1800年・p.310)

c. 「きのふ、お庭拜見にいたはい。ドウダ。とんだことよ。泉水つき山、どふもかふもいへ

³ 小柳(2018)と北崎(2023)では対人化の反例として、命令形が本来の命令の意を失って(逆接仮定または順接仮定)条件形式的に用いられるようになる変化が取り上げられている。

⁴ 近代以降はドウセが共通語として広く使われ、ドウデは明治・大正期にその例が数例見られるが、昭和期以降は例が見られなくなり、現在の東京語(共通語)では用いられていない。

- ぬ。おく庭の亭で一盃したが、此庭が又ドウモいへぬ」(嘶本・仕形嘶・1773年・p.292)
- d. 女君「…ここには何もかもな賜びそ。君達にあまねく奉らせたまへ」
(落窪物語・986年・p.286・20-落窪0986_00004)
- e. …葵のいと小さき。何も何も、小さきものは、みなうつくし。
(枕草子・1001年・p.271・20-枕草1001_00145, 川瀬2023:51)
- f. 千太郎「何もそのやうにあんじることはない。いふて見たがよひ」
(箱まくら・1822年・p.138・52-洒落1820_01048, 川瀬2023:53)
- g. 豊なるたづき求め顔に、ねぢけがましきに、ながらへ侍らば、とてもかくても同じ事なるべけれども、
(浜松中納言物語・1062年頃・p.300)
- h. 日本国に平家の庄園ならぬ所やある。とてものがれざらんものゆゑに、
(平家物語・1250年・p.250・30-平家1250_03017)

次に、②の事例としてイツツがある。イツツは「対をなす二つ」あるいは「二つ一組」という意を表す漢語「一双(一雙)」を語源とし、中世後期以降、(3a)「に」を伴った「いつさうに」の形で「(両者を)まとめて、一度に」の意の様態副詞として用いられるようになった⁵。副詞用法の発生当初からイツツが用いられる文の構造は、「Pであるなら(Pではなく、その代わりに)、イツツQ」と捉えられ、比較選択の副詞「むしろ」と類似したものであった。近世になると、イツツは様態的意味は薄れていくものの、(3b,c)のように中世後期と同様の構文環境で用いられ、さらにイツツの後続内容を選ぶしかなく、という否定的な気持ち(自暴自棄や諦めなど)を表す例に偏り、現在の使われ方に至っている。

- (3)a. 鬼「ごんご道断にくひ事をいひをる、身共がままにならずは、いつさうにふたりながらくはふ」
(虎明本狂言集・鬼の継子・1642年・p.489・40-虎明1642_04007)
- b. [食べてはいけない魚を勧められたお坊さんが]あまりつよくしんしやくいたしたらバ、またじやうがこわいとて、人にそしらるゝであらふほどに、人にそしられうよりハ、いつそのこと⁶くハふといふた。
(嘶本・初音草嘶大鑑・1698年・p.150)
- c. 徳兵衛「子はありながらその甲斐なく、無縁の手にかからうよりいつそ行き倒れの釈迦荷ひがましでおぢやるわ」
(女殺油地獄・1721年・p.244・51-近松1721_05003)

なお、小柳(2019:314-317)は(程度、陳述)副詞化する際の意味的条件として様相性あるいは量性を含意する、または推意させることを指摘しており、陳述副詞化する語類に注目すると、例えば「決して」は「確実性・決定性」、「偉い事」は「評価性・情意性」という意味的条件を満たしていると述べている。この副詞化の意味的条件を、本発表の考察対象の語類に直接適用し得るか否か定かではないが、イツツは量性・多様性、セツカクは評価性・情意性を基盤としていると見える。

2.2 構文環境や形態・統語変化

以下、評価を表す陳述副詞化に見られる構文環境や形態・統語的特徴について見ていく。

⁵ 漢語「一双(一雙)」はイッサウからイツツウ、さらにイツツと音変化している。

⁶ イツツノコト(ニ)はイツツを強調した表現とされる(湯澤1954、飛田・浅田1994)。近世後期に見られるイツツノヤケニ、イツツノクサレ(ニ)も同様に捉えられる。

まず、全体的な特徴として、構文的に単文構造ではなく複文構造を取り、(4)のように単文・主節ではなく従属節における出現例に偏るようになる。(4a,d)は単文・主節で使われる例、(4b,c,e)は従属節で使われる例である。また、文内の述語の直前から文の周辺部(特に、文頭)で事態全体の前に位置するようになる出現位置の変化が見られる。

(4)a. ある人→十二三なる子「せつかくならへ、やがて、十月十三日に成ぞ、百はたごくいにつれてゆかふぞ、よくおほえて其時うたへ」

(噺本・整版九行本昨日は今日の物語・1636年・p.168)

b. 又は一步小判を取出し四五年に折角延しけるかひなしと算用してあるも有、

(本朝二十不孝・1686年・p.137)

c. 女房→客「せつかく煮やしたから、あがりやし」 (噺本・近目貫・1773年・p.201)

d. 文「十八さ。おめへは」縫「主よりやアーツうへさ」文「十九か」縫「アイそれだものヲ。どふせ叶ねへ事た」(深川新話・1779年・p.224・52-洒落1779_01025, (1b)の再掲)

e. 中居その「どふせおごしきが明てをりますから、おひとりはこちらにいたませう」

(深川新話・1779年・p.221・52-洒落1779_01025)

次に、小柳(2019:317-321)は副詞の統語的特徴である連用修飾機能を、もともと有している形容詞連用形や動詞テ形などと異なり、本来的に有していない名詞は、連用修飾機能を獲得する統語的条件として、(i)「に、と」のような接辞類の添加や重複、(ii)挿入句経由、(iii)「X+の」という連体修飾句経由を挙げている。本発表の名詞出自の語類では(i)と(iii)のケースが見受けられ、(i)に関してはイツは「に」を伴って連用修飾機能を担っている(前掲の(1a))。ただし、ショセン・セツカクはそれ単独で副詞として用いられる。(iii)に関してはセツカクが該当する。(5)のセツカクは「能楽を演じる三日の中で特に苦労や尽力するほどの大事な」という意味を表しており、[[副詞のX]+の]+名詞]に読み取れ、(4a)の連用修飾語化した例に近い。

(5)をよそ、三日に三庭の申樂あらん時は、指寄の一日などは、手を貯いて、あいしらいて、三日の中に、殊に折角の日と覚しからん時、よき能の、得手に向きたらんを、眼睛を出してすべし

(風姿花伝・1400年頃・p.396)

また、語によっては多義的で複数のタイプにまたがることもあれば、歴史変化によって所属が移行することもある(川瀬2023:5)。例えば、サスガ(ニ・ハ)は接続詞出自の副詞用法から感動詞に近い用法へという変化を辿る。語構成の面でサスガ(ニ・ハ)は「中称の指示副詞「さ」+サ変動詞「す」+程度や様態を表す助詞「がに」」から成り立っており、本来「そのようにあるほどに」という意を持つが、上代から逆接の意を表す接続詞として用いられたシカスガニと歴史的に派生関係にあり、中古から例が見られるサスガ(ニ・ハ)は、使用当初から逆接の接続詞のような意を表す副詞用法で用いられる。その意味は出自の影響から前文の内容を容認しながらも、話し手の想定と対立する当該事態もやはり認めざるを得ないことを表し、「それでも、そうはいうものの、そう言ってもやはり」といった意味で用いられていた(=6a)。形態面ではサスガニの「に」が接辞(活用語尾)となったサスガナリのような形(=6c)や、「に」を伴わないサスガ(=6b)も見られはじめる。中世以降、話し手の想定と適合する当該事態に対して順当だと認める(6d,e,f)のような例が見え、

これが現代語の「さすが(首都だ!)」のようなプラス評価を表す感動詞の用法⁷に拡張していく。このような例ではサスガと「は」を伴うサスガハが多く使われ、近世期にサスガ(ニ・ハ)の語形すべてが揃うようになった。

- (6)a. …年ごろわたらひなどもいとわろくなりて、家もこぼれ、使ふ人なども徳ある所にいきつつ、ただふたりすみわたるほどに、さすがに下種にもあらねば、人にやとはれ、使はれもせず、
(大和物語・951年・p.375・20-大和0951_00001)
- b. 頭の中將「なかまろをまことに近く語らひたまはぬ。さすがにくしと思ひたるにはあらずと知りたるを、…」
(枕草子・1001年・p.243・20-枕草1001_00129)
- c. 人のほどの心苦しきに、名の朽ちなむはさすがなり。
(源氏物語・末摘花・1010年・p.301・20-源氏1010_00006)
- d. 大名「国本へのみやげものを、町へいでてかはふと存る、(中略)、かひ物をととのへて、急でくだらふ、さすがみやこにて御ざあるぞ、かりそめにまかり出ても、にぎやかにて、何をかはふ共ままで御ざる」(虎明本狂言集・饅頭・1642年・p.319・40-虎明1642_02030)
- e. この方遺恨なき上は心しだいに、師弟の仲、何とぞ挨拶いたしたいと、さすがは武士の神妙さ。
(心中万年草・1710年・p.209・51-近松1710_16001)
- f. 半兵衛「在所の親の遺恨もなくエエ、さすがぢや、見事に死んだ」
(心中宵庚申・1722年・p.473・51-近松1722_21003)

最後に、副詞の主な機能は連用修飾語(以下、連用用法)に立つことであるが、語によっては「の」を伴って連体修飾機能で用いられる場合(以下、連体用法。「さすがのベテラン」「せっかくの休み」)がある⁸。連用用法と連体用法の関連性をめぐって、蓮沼(2012, 2014)は現代語のセツカクの例を取り上げ、両用法における順接関係と逆接関係の分布をBCCWJを使用して調査している。その結果、いずれの用法においても逆接関係の例が順接関係の例より多く使われていると述べた。この指摘に関連して、表2を見ると、セツカクは現代語のような意味的、構文の特徴がほぼ揃ったと見なされる近世を通して、逆接関係の構文環境に多く用いられていることがわかる。歴史的にもセツカクの構文環境(特に、複文の従属節)において、まず近世前期に逆接関係の複文(=4b)が、その後、近世後期に順接関係(原因・理由)の複文(=4c)が成立していることと関係している可能性が考えられる。

⁷ 中世前期までのサスガナリ(中古の(6c))、サスガヂヤ等は当時の副詞用法と同様、「そうは言ってもやはり何々だ」という意味を表していた。感動詞的用法と見なされる例には近世期の(6f)の他に、(i)「アルチバァシェフが、これからの興味は百姓と私娼に集注されると云ふ意味の事を言つてみるさうだが、これはさすがだ!」と感歎せざるを得なかつた。(太陽1925-11・木村毅「最近の小説に現れた女性(後略)」60M太陽1925_11015)、(ii)郷子「…行こう、あ、同室の人は一人でよかったんだよね」と、見舞いの品を見せる。将一「うん…さすが」(BCCWJ・PB39_00325・岡田恵和「恋文」2003年)がある。

⁸ 他に、「せっかくだけど、せっかくだったのに、せっかくだから」「どうせなら」のように用いられる場合がある。これらは従属節の事態が省略されてきたもので、渡辺(2001)の言う「副用語から自用語化したもの」「圧縮表現」に該当する。これらも主節との意味関係を示すが、それ全体で副詞句として前置き表現に近い用法と見なされる。

表2 セツカクの連用用法と連体用法における順接・逆接の分布

	連用用法			連体用法				
	近世前期上方語	近世後期上方語	近世後期江戸語	近世前期上方語	近世後期上方語	近世後期江戸語		
順接関係	2	7%	4	10%	17	16%	9	45%
逆接関係	25	93%	36	90%	91	84%	1	55%
計	27		40		108		1	20

*前件と後件との意味関係が定まらない例は除外した。

また、表2から、連用用法に比べて連体用法においては順接関係の例が逆接関係の例と大差なく用いられていたことが見て取れる。近代のセツカクの例も調査し、現代語の使用傾向に近づいていくのか検討の余地がある。なお、セツカクのようなプラス評価を表す副詞は前述したように逆接関係が順接関係より多いことが確認できたが、それと反対の使用傾向が、マイナス評価を表す副詞に見られるか否かについても追加検証が必要である。

3. おわりに

本発表では、評価を表す陳述副詞の史的展開に見られる意味的、形態・統語的特徴を考察した。今後も、個別の副詞の語史記述とともに、文法史研究としての副詞(化)研究を進めていきたい。その際、単なる個別の現象に見えるものが、実はある一定のまとまりを持った表現類が辿る変化パターンに属する可能性があるため、副詞の共時的かつ通時的分析において関連する事例との比較検討が有効であると思う。また、これまで言及した副詞化という言葉現象は、言語変化の一般的な傾向に共通する場合もあれば、日本語独自の特徴といえる場合もある。本発表で示した、日本語における評価を表す陳述副詞化の特徴を対照言語的、通言語的事例に照らし合わせて捉え直すことも試みたい。

【調査・引用資料】○大和物語・落窪物語・枕草子・源氏物語・平家物語・虎明本狂言集・近松世話浄瑠璃・深川新話・箱まくら…『日本語歴史コーパス(CHJ)』(国立国語研究所, 中納言 2.7.2 データバージョン 2024.03), ○浜松中納言物語・風姿花伝・傾城禁短気…『日本古典文学大系(岩波書店)』, ○本朝二十不孝…『新編西鶴全集(勉誠出版)』, ○嘶本…『嘶本大系(東京堂出版)』, ○春告鳥…『日本古典文学全集(小学館)』, ○太陽…『日本語歴史コーパス 明治・大正編Ⅰ雑誌』(国立国語研究所, 中納言 2.7.2 データバージョン 2024.03), ○BCCWJ…『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(国立国語研究所, 中納言 2.7.2 データバージョン 2021.03)

【参考文献】(紙幅の関係上、注に載せたものは省く) 林禎映(2021a)『日本語副詞の史的研究—評価を表す叙法副詞を中心に—』J&C, ソウル/林禎映(2021b)「近世資料の文体差による叙法副詞の使用実態 —「サスガ(ニハ)」を例にして—」『日本語教育』98, pp.237-250, 韓国日本語教育学会/川瀬卓(2023)『副詞から見た日本語文法史(ひつじ研究叢書(言語編)194巻)』ひつじ書房/北崎勇帆(2023)「意味変化の方向性」と統語変化の連関」ナロックハイコ・青木博史編『日本語と近隣言語における文法化』pp.291-318, ひつじ書房/工藤浩(1997)「評価成分をめぐる」川端善明・仁田義雄編『日本語文法—体系と方法—』ひつじ書房, pp.55-72/工藤浩(2000)「副詞と文の陳述的なタイプ」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩『日本語の文法3 モダリティ』pp.161-234, 岩波書店/工藤浩(2016)『副詞と文』ひつじ書房/小柳智一(2018)『文法変化の研究』くろしお出版/小柳智一(2019)「副詞の入り口—副詞と副詞化の条件—」森雄一・西村義樹・長谷川明香編『認知言語学を拓く』pp.305-323, くろしお出版/鳴海伸一(2015)『日本語における漢語の変容の研究—副詞化を中心として—』ひつじ書房/蓮沼昭子(2012)「事態の既定性と「せっかく」構文」『日本語日本文学』22, pp.19-42, 創価大学日本語日本文学会/蓮沼昭子(2014)「副詞「せっかく」による構文と意味の統制—コーパスにおける使用実態の観察を通して—」益岡隆志他編『日本語複文構文研究』pp.427-467, ひつじ書房/深津周太(2022)「様態副詞の程度副詞化—「ちっと/そっと」の対照から—」『静言論叢』5, pp.111-124, 静岡大学言語学研究会